連翹の花

新村出

青空文庫

私のすきな春の花に連翹の花がある。白井さんの『植物渡来考』には、支那からの渡来としてあり、『延喜式』にあちこち諸国から産出したのを朝廷に貢献したことが記るされてゐるのは、薬園に培養したものであつて、それぞれの国土の自生ではあるまいとのことである。然し奈良朝の『出雲風土記』をみると、意宇郡と秋鹿郡との産物として、「凡そ諸山野所在草木」として、その中に此のイタチグサと訓してある所の連翹の名をあげてあるから、必ずしも中古の舶来とも限るわけにはゆくまいと思ふ。『万葉』にも『古今』にも出てこないには来ないけれども、大陸伝来の植物と断じてしまふのは惜しいやうな気がする。尤も白井さんは、最後の名著たる『樹木和名考』の方には、「一種ヤマトレンギョウと呼ぶもの中国に於て発見せられたり」と報じてをられたから、『出雲風土記』の記録と照らしあはせて更に考究する必要があらう。古名としては、『新撰字鏡』には、アハクサ、イタチハゼ、『本草和名』と『和名抄』とには、イタチハゼ一名イタチグサとある。いづれも感賞植物として扱はれたのではなく、むろん薬用植物として登録されたのである。

名称の詮索は、私の悪癖で、ついうかうかと出て申訳がない。後世は専らレンギョウと字音語にばかり呼ぶが、折々はイタチハゼの古名を拾ひあげた雅人がないではない。最近誦んだ秋桜子の句に、

篠党の末百姓やいたちはぜ

といふのを見た。これは古く太祇の「連翹や黄母衣の衆の屋敷町」といふ名句をおもひおこされる。近世の俳句にはおもしろい連翹の句が頗る多いが、省くことにしよう。

イタチハゼといふ名なども、元来何となく俳趣を帯びてゐるが、蔓生のにはタニワタシといふのもあり、又シダレレンギョウなど呼ばれるのもある。とかく名に興ずる私としては、かういふ低回趣味に堕して困る。

感賞植物として、いつの時代から連翹がもてはやされるやうになつたか。一条兼良公の『尺素往来』のうちに庭園植物の花木を列挙した条には、春の部などにもそれが出て来ないが、江戸時代になつてからは、連翹を生花にしたことは盛んであつた。茶室にも用ゐたことは、近衛豫楽院の『槐記』をみてもすぐわかる。

歌に詠んだのは、俳句より遥かにおくれて、或は明治も末季あたりからではあるまいかとさへ思はれる。俳句に詠まれたのは元禄期であるが、太祇のころの天明時代の詩僧六如上人の『葛原詩話』をみると、「連翹花極めて愛す可きものにて目前の花なれども題詠にも及ばず、この花の不幸と謂ふべし」と云ひ、支那の詩人の詩句を抄し、且つそれらの事を同代の詩僧大典禅師に語つた所が、大典から其の花の詩を贈つてよこしたといふ一雅話が載つてゐる。その詩には、長い序詩が添はつてゐるが、それに由ると、誓願寺の後ろの一院に連翹があつて、

「松に仗つて上に聳ゆること数尋、花を著けて四方に垂下して簇々たり、偶々その門を過ぎて之を睹て盤桓去ること能はず、因つて一律を賦して六如上人に呈す」といふ趣が録してある。こゝにその詩文を抄出するのは面倒だから省くが、この花を愛せらるゝ雅友の一読を希ひたい。先年私はその連翹の存否を探つたが、遂にわからなかつた。老友祐範上人の住する知恩院山内の信重院の古井戸の畔りには、七十年ほどの老樹が昨今花ざかりである。

百余年むかしの本に、俗諺として、「れんぎやう笑へば梅も笑ひ出す中にふくれる柳かな」といふ文句が挙がつてゐるが、短歌では与謝野晶子夫人の数首の如き、最も古い方であらう。木下利玄の明治三十七年の作にも幼なき一首があつた。夏目漱石の作句に二つ面白いのが存するが、『虞美人草』で、京都に来た宗近君が琴の音をきく所に、隣家の連翹がみえるところが描かれてゐるのは、人々の容易におもひ出す所であらう。明治の初期には、ライラックを連翹と訳してをさまつて居たやうなのんきな話も残つてゐるが、今は短歌にもかなり多く見あたる。古京の故人中西松琴翁の集中から六首を抄しておいたこともある。素人の自分にも連翹の歌は何首か詠じてある。七八年以前のこと、毎年西向日町の農村の畑地にその花を感賞にゆきゆきしたものであるが、その後向日庵主から根分けをしてもらつて庭に植ゑたのが、数年ぶりで一昨年から咲きはじめ、殊に本年は昨今軒端まで花が満開である。六如や大典にも見せたいやうな気がする。三月中旬東京から帰宅したときの拙詠にこんなのがあるので、お笑草に記るしてこの稿を終るとしよう。（神武天皇祭の日）

けさ起きて雨戸をくれば朝日照り連翹の花ひらきそめたり

いつの間にか連翹の花さきにけり莟みおそしとかこちたりしを

わがめづる連翹の花さきにけり五日六日の旅ゆかへれば

留守のまを連翹の花さきにけりきけばきのふの朝ゆさきぬと

青空文庫情報

底本：「花の名随筆3　三月の花」作品社
　　1999（平成11）年2月10日初版第1刷発行
底本の親本：「新村出全集　第一四巻」筑摩書房
　　1972（昭和47）年3月
初出：「街道」
　　1941（昭和16）年5月号
入力：岡村和彦
校正：noriko saito
2019年9月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

連翹の花

新村出

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/